っているのを見つけるかもしれない。あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい」（34—37節）。

このなかに三度、「目を覚ましている」という言葉が現れます。イエスは、十字架にかけられる前にゲツセマネの園で祈った時、弟子たちに三度、目を覚まして祈るようにとすすめましたが、それは弟子たちが三度眠ってしまったからでした。自らをいつも醒ましているようにとは、信仰の姿勢について言っている言葉です。キリスト教の大事なキーワードであるこの言葉は、冷静に「目を覚ましている」という一貫した状態を指しています。神に対して、いつも冷静に自らを醒ましていること。それは、いちじくの葉が茂ることで夏が分かるのと同じようにして、神様が自分の戸口に立っていることを悟れるように、自らを醒ました状態で神様を待っているべきだという、信仰の生き方を表します。

聖書の原文で目を覚ましていなさいというのをグレーゴレイテ (γρηγορεῖτε, gregoreite) といって、キリスト教の大事なキーワードです。俳優のグレゴリー・ペックなど欧米のグレゴリーという人名は、この「目を覚ましていなさい」を意味するグレーゴレイテという言葉からきています。古代や中世のローマ・カトリックの教皇には、グレゴリオという名の教皇が何人もいました。グレゴリオ聖歌を作ったのもその名の教皇です。神様に対していつも自らを醒ましている、目覚めているという信仰を表す名前です。

終末に醒めていきる——「時の終わりのための四重奏曲」

イエスの語った、主人の帰りを待ち目を覚ましているというたとえでは、「家を後に旅に出る人（主人）が、僕たちに仕事を割り当てて責任を持たせ」ています。一人ひとりに、どんな仕事をなすべきかを示して、一人ひとりに責任をもたせているというところがとても重要だと思います。イエスは弟子たちに、あなたがたは、時の終末に対してこのたとえの僕や門番のように生きているのだ、ということを示したのです。神信仰は、時の終末に自分の戸口に神様が立っているのを悟ることができるように、自らを醒まして生きていることであり、それは神様が自分に割り当てている仕事があることを受け止めて、その責任を担い、夕方も、夜中も、鶏の鳴くころも、明け方も、自分に与えられているすべての時を生きることで、与えられた人生には、日の落ちかかる夕方のような、また夜中のような、暗い闇に覆われることがあります。闇のなかでも、家の主人の戻りを待つ僕や門番のように、神様が自分に割り当てられた仕事や責任があることを受け止めて、神様が自分の戸口に立つのを迎えられるようにして人生を生きるということが、「目を覚まして」の意味なのです。

最後に余談ですが、今日のお話を準備しながら私はある音楽を聴いていました。それは、20世紀のフランスの、オリヴィエ・メシアンが作曲した「世の終わりのための四重奏曲」という室内楽です。初めて聴いたのは、メシアンの生誕100年にあたる2008年に軽井沢の聖パウロカトリック教会で行われた演奏会の録音放送で、この曲にとっても胸を打たれました。「世の終わりのための四重奏曲」は不思議な曲で、メシアンは聖書の黙示録にヒントを得て、これを作曲しました。全体で八つの曲からできていて、後半の6曲目と7曲目が黙示録にある世界の終わりを表現した、騒々しく激しい曲になっています。私が初めて聴いた演奏では、チェロを弾いた工藤すみれさんの演奏が、なんとも非常に鬼気迫る感じで、強く印象に残りました。

世の終わりを描く激しい6曲目7曲目を挟むようにして、前の5曲目はチェロの、後ろの8曲目はヴァイオリンのソロによって、それはそれは静謐（せいひつ）な音楽が流れます。最後の8曲目は、ヴァイオリンの高音が長く長く伸ばされたまま、彼方に消え入るように曲は結ばれます。それらは主イエス・キリストの永遠と不滅を歌う頌栄になっていて、世の終わりの曲を前後から挟む形になっています。曲の原題の、“la fin du temps (ラ フィンデュ タン)” は、“End of time”の意味であり、「時の終わり」と呼ぶ方が正確なようです。八つの楽章からなっているのは、天地創造の6日間のあと7日目に安息日があったことと、永遠をあらわす8日目の第8曲で完成するという意味なのだそうです。

この曲は通常の弦楽四重奏と違って、クラリネット・ピアノ・ヴァイオリン・チェロという変わった編成で、なぜそうなっているかには、理由があります。これをメシアンが作曲したのは、第二次世界大戦中の1941年のことでした。彼は戦争の捕虜となって、ドイツ軍の捕虜収容所である、ポーランドのゲルリッツにある第8—A収容所に入れられていました。メシアンは収容所の中で、一つの四重奏曲を作曲します。幸いにも、収容所の所長が音楽に理解のある人だったことから、メシアンにこの作品を収容所内で演奏する機会が与えられたのです。演奏者は捕虜のなかから選ぶしかありませんでした。メシアンは収容所で知り合った3人の音楽家と集まり、次に楽器を調達することにしました。ところが、物資がろくにない捕虜収容所の中で手に入った楽器は、「弦が3本しかないチェロ」や、「鍵盤を押さえると元に戻らない調律の狂ったピアノ」とか、どれも音程が壊れて使い物にならなそうなものでした。しかし、そのおんぼろ楽器によって、捕虜収容所の中で「時の終わりのための四重奏曲」は世界初演されたのです。1941年、真冬の1月15日、零下30度に達する厳寒のなかで行われた演奏会に、数千人の捕虜たちが集まって耳を傾けたと言います。この初演を聴き終えたナチスの収容所所長は、メシアンに感謝の気持ちを告げたそうです。捕虜収容所から解放された戦後に、メシアンは「私の作品がこのときほど、理解と集中力をもって聴かれたことはなかった」と語っています。世の終わりを表すとても不協和な和音の打撃に支配された楽章も、そしてイエスの永遠と不滅を表す、美しい和声を極限まで引き伸ばされたスローテンポで歌う楽章も、ろくに音の出ない楽器を苦勞して操りつつ、真剣に演奏され、真剣に聴かれたのでした。きっと「目を覚ましていなさい」と、時の終末を悟らせるような演奏だったのだらうと想像されます。この曲を聴くと、主イエスが言われたことが分かるように思われました。「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」。戦争捕虜として明日をも知れない境遇のメシアンが、仲間と鳴らない楽器を奏でつつ、その現実のなかで、戸口に立ち給う主イエス・キリストの平安に対して、しっかりと目覚めていたことが感じられる曲です。マルコによる福音書13章の黙示録的終末の奥底に流れているのは、私たちに与えられている現実を自分自身の事柄として受け止め、自分は何をなすべきか、役割と責任について目を覚まして向き合うべきだ、というメッセージなのです。私自身も、我が戸口に立ち給う救い主イエスの「あなたがたに言うことは、すべての人に言うのだ。目を覚ましていなさい」という福音を聴きつつ、与えられている時を生きてゆきたい、と心から願います。

2013年5月22日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録